

FASID 第 247 回 BBL セミナー報告（記録要旨）

テーマ：「開かれた新しい国際会議“東京栄養サミット”～成果と今後の展望～」

日時：2022 年 1 月 12 日（水）12 時 30 分～14 時 00 分

場所：Zoom ウェビナーライブ配信

講師：稲岡 恵美氏 / 外務省国際協力局国際保健政策室
課長補佐/国際保健専門官

出席者：合計 34 名

発表要旨

2021 年 12 月“東京栄養サミット”が多様な関係者の参加のもと開催された。会合では、政府・民間・NGO などそれぞれの立場から今後の行動計画（コミットメント）が発表され、「東京栄養宣言」としてとりまとめられた。このサミットは、関連する多様な分野の多様な関係者のもと、具体的なアクションを議論したという点で、開かれた新しい国際会議として注目された。内容は以下の通り。

東京栄養サミット概要

1. 背景：栄養サミットはオリンピック・パラリンピックのホスト国が開催する慣行。未だに減らない飢餓、栄養不良の二重負荷（低栄養と過栄養）、新型コロナウイルス感染拡大による世界的な栄養状況の悪化は課題となっている。
2. 目的：世界的な栄養改善に向けて、現在の施策をレビューし、今後の行動を具体的に発表する。
3. テーマ：「すべての人に食と健康と繁栄を」
4. 日程：2021 年 12 月 7 日～8 日
5. 形式：ハイブリッド形式（国内参加者は会場、海外参加者はオンライン）
6. 参加者：首脳級および閣僚級等約 60 か国、国際機関、民間企業、市民社会、学術界の代表等、計 90 名以上が発言。

東京栄養サミット 5 つのテーマ

1. 健康：栄養という視点をユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）に向けた取組に統合する
2. 食：健康的で持続可能な食料システムの構築
3. 強靱性：紛争など脆弱な状況下における栄養不良対策
4. 説明責任：データに基づくモニタリング
5. 財源：栄養のための国内資金動員と革新的資金調達

東京栄養サミットがもたらすもの

1. 参加した関係者（国・企業他）によるコミットメント
66 か国の政府、26 社の企業、51 の市民団体を含む 181 ステークホルダーから 396 のコミットメントが提出され、270 億ドル以上の栄養関連の資金拠出が表明された。
2. 東京栄養宣言に対する賛同（エンドース）
65 か国、60 社の企業、58 の市民団体を含む 215 の関係者がエンドースを表明。「栄養は個人の健康と福祉の基礎であり持続可能な開発と経済成長の基盤である」とし、会合で設定した 5 つのテーマについて具体的方向性を示し「2030 年までに栄養不良を終わらせるため、更なる行動をとる」とした。

日本のコミットメント（国内政策）

- ✓ 「誰一人取り残さない日本の栄養政策」
- ✓ 健康的で持続可能な食糧システム構築
- ✓ 従業員の健康づくりに取り組む企業の価値の向上
- ✓ 学校給食や食育の推進

日本のコミットメント（国際協力）

- ✓ 我が国の栄養関連施策の強化を推進し、その経験や教訓を国際的に発信。

- ✓ 今後 3 年間、二国間および多国間の枠組みを通じ、3000 億円以上の支援を行う。
- ✓ UHC の達成、持続可能な食糧システムの構築、栄養の国際目標の実現に向けて、人間の安全保障や地球の持続可能性を考慮しながら国際支援を行う。
- ✓ 国内外の栄養改善の取組強化に向け、分野横断的な連携体制を構築。

新しい国際会議

1. 政府のみならず民間・市民社会・学術他が参加
2. 縦割りにならない分野横断的な体制づくり
3. 「交渉」ではなく「行動」を重視 ※ 成果文書の文言交渉に時間をかけず、各々の行動計画の検討や公表を重視。

多様な分野の巻き込み（例：食料システム）

2021 年 9 月の国連食料システムサミット（国連事務総長主催で国連加盟国首脳、閣僚、国際機関の長、等が出席）との連携し共同ステートメントを发出。

具体的な行動を重視：コミットメント

- ✓ 東京栄養サミットはそのコミットメントを発表する場を提供する。公表することにより、市民や関係者がそれを知り、協力し、進捗を確認する狙い。
- ✓ 質の高いコミットメントを発表してもらうため、ガイドブックを作成し、国際的なアウトリーチグループを結成して、個別支援しつつ、サミットでの発表を実現。
- ✓ SMART（具体的・測定可能・達成可能・適切・期限付き）なコミットメントを東京栄養宣言の付属文書として取りまとめた（HP に掲載 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100270082.pdf>）。

今後の展望

- ✓ コミットメントの進捗確認
 - アカウンタビリティ・フレームワークを新設。今後、それをを用いつつ Global Nutrition Report (GNR)が継続的にモニタリングする体制を構築した。
- ✓ 行動計画を着実に実施のための枠組・協力体制
 - 各ステークホルダー（政府、援助組織、民間組織・企業、市民社会、アカデミア）の集合体を形成し相互に協力する体制を構築した。

JICA による栄養協力

- ✓ 慢性的な低栄養とともに過栄養（栄養不良の二重負荷）に対応
- ✓ 開発途上国の子どもや女性など脆弱な人々に重点
- ✓ 開発途上国の人・組織・社会の能力強化と主体性を重視
- ✓ 日本の経験の活用
- ✓ 保健、農業・食料、水・衛生、教育などマルチセクショナルな取組の推進
- ✓ 国内外のパートナーと連携したマルチステークホルダーによる取組の推進
- ✓ アフリカが重点地域。インド・太平洋地域への協力も積極的に実施

その他、栄養サミットの広報活動の紹介として外務省 HP で公開されているオープニング動画 <https://www.n4g-tokyo2021.jp/movie.php>（YouTube で 6 言語視聴可能）、（5 つのテーマについて説明しているオープニングビデオを上映）、東京栄養サミットに関する報道、日本の栄養政策に関する国際発言、厚労省作成のパンフレット（4 か国語）、林外務大臣によるランセット誌寄稿、等々も紹介された。

QA セッション

- Q1. 今回のサミットで、総理大臣から 3 年間で 3,000 億円以上の拠出との発表があったが、大まかな拠出の内訳をご教示頂きたい。
- A1. 二国間協力（技術協力、無償、円借款）や国際機関を通じた支援が含まれる。具体的な事業内容は今後検討していくことになる。具体的には、これまでから取組んでいる、緊急食糧援助、栄養指導、

母子保健（母子手帳活用）、農業生産性向上、水・衛生、学校給食など。またアフリカにおける職と栄養のアフリカイニシアチブ（IFNA）¹の拡充なども含まれる。

- Q2. 1日目の各界からのコミットメントの中で、何か目新しいもの、注目すべきものをご教示頂きたい。
- A2. 注目すべき新しいコミットメントがたくさんあった。ドナーに依存するだけでなく、途上国側から国家栄養予算の拡充など資金的コミットメントがあった点を評価している。また、政府のみならず、多くの民間企業が、社会貢献（CSR）を越えて本業として栄養に取り組むコミットメントが発表されたことも大きな進展。気候変動への対応や地球の持続可能性など、昨今の時代の要請を反映するものも多かった。
- Q3. テーマを設定する際、テーマ設定は順調に進んだか？各国や組織の間で合意が難しかったテーマもあったか？
- A3. テーマの設定は、世界の専門家を集めたグループで、電話会議を重ねながら決定した。専門的な根拠があるため順調に進んだが、そのテーマの下、何を優先的に実施するか、どこにお金を付けるかというところで各関係者による意見の相違はあった。工夫した点として、参加者はどうしても先進国の人が多くなるため、途上国の参加や意見を取り入れようとし、苦労はあった。
- Q4. Tokyo Nutrition for Growth Summit 2021（N4G）5つのテーマのうち“3.強靱性”についてどのような議論があったか、今後の課題と対応策など分かる範囲でご教示頂きたい。
- A4. 強靱性に関する主な論点のひとつは、緊急人道支援と長期的開発計画との間で、それらのバランスをどう取って進めるかであった。国家計画を策定することが容易ではない場合もある。また、国際機関の中では関心や分担が異なるため、それぞれの拠出金を最も効果が上がるように、適正に配分しながら長期的な栄養改善を実現するか、そのために、いかに各機関が協力していくか議論がなされた。
- Q5. JICAでも実施しているマルチセクショナルな栄養介入について、あまり重要視されていなかったように感じたが、何らかマルチセクショナルな栄養介入に関して議論や意見交換がされていたか？
- A5. マルチセクショナルな栄養介入を重視する発言は多かった。一方、どのように異なる分野を統合的に進めるか、必ずしも具体的な行動計画は十分に話されなかったという印象。今後は、行政機関の縦割りや、多様な関係者のもと、どのようにして、マルチセクショナルな視点でより効率的な成果を上げるか、検討することが重要と考える。
- Q6. 2030年までのSDGs実現のために、年間2.5兆ドルが不足しているという国連の試算があるが、栄養分野に限った場合、SDGsをはじめ複数の国際的目標達成のためにどれぐらいの資金ギャップがあるのか？こうした資金不足の規模は、今回のサミットの資金プレッジと比較してどれほどのものか？今後、資金ギャップを埋めて目標達成を可能にするためには、どのような取り組みが必要なのか、具体的にサミットで議論されていたらご教示頂きたい。A6. 非常に重要な視点であるが、その試算は困難であることから、定まった数値は示されていない。特に栄養は複数のセクターに関連するため、直接的な栄養介入だけでは目標達成は困難。一方、東京サミットで達成した資金量は、ロンドンサミットを大幅に上回る資金を調達した。
- Q7. 主要ドナーや参加国の中に中国が含まれていないことが気になった。今回の栄養サミットでの中国の参加状況（参加・不参加、準備段階でのアウトリーチなど）はどのようなものだったのか？また、その背景事情などあればご教示頂きたい。
- A7. 今回の招待国は、栄養不良が課題となっている国、栄養分野に資金拠出する意思のある国を、国連機関の指標等から透明性をもって選定した。中国は選定基準に沿わず含まれていなかった。世界人口をかかえ、農業により世界の食を支える国でもあり、今後とも関与を求める必要があると考えている。

以上

¹ <https://ifna.africa/>